

海

糸満中学校 三年
金城 由佳

ぼくは海 青く透明な海
いろとりどりの魚とサンゴが
ぼくの中で生きている
月の光がさしこめば
サンゴの新しい命が 生まれる
太陽の光がさしこめば 魚たちが
一生のパートナーを見つける
こうして ぼくの中で
たくさんの命が生まれた
ぼくは海
魚やサンゴだけを見ているわけじゃない
君たちの事も 見ているよ
ぼくの上を通るサバニは
魚をとっていくけど 魚はいつも笑ってる
「こわくないの？」と問いかけたら
「ぼくが人に命をあたえる。海と同じ事がで
きる。」とだって笑ってる
ほかにも人間は サンゴをとっていく
サンゴは笑って
「人間は私をキレイにしてくれる。
そして、私を身につけて喜んでくれる。」
そういった
五月にはハーリーで
ぼくにお礼をしてくれる
時には
一緒に遊んでくれる
それがぼくの楽しみ 永遠に続くと思った
でもね
突然 大きな音が 聞こえた
気になって みてみたら
ぼくの上を 鉄でできた大きな船が
島へ向かっていくつもいくつも通っていく
「なんだろう」と思った瞬間
ドンッ ドンッ という音が
船から 聞こえた
島からけむりと悲鳴が あがった
戦争だ
戦争がはじまったんだ
いつもは鳥たちが飛んでいる空に
飛行機が飛ぶ
その飛行機から 鉄の塊が落ちて
人々の命を うばった

またある日
子供たちをたくさん乗せた船が
ぼくの上を通った
でも あの大きな音とともに
子供たちは 沈んだ
「父ちゃん、母ちゃん。」
そういつてはぼくの奥深くまで
子供たちは 沈んだ
そして 黒い雨が 降ってきた
いつもの雨は ぼくと同じで
命をあたえるはずなのに
黒い雨は人間の命をうばっていった
何年たっても ぼくの中には
子供たちの最後の言葉が 残っている
そして あの日から六十八年たった
今 君たちが泳いでいる
ぼくの中には たくさんの人々が
またねむっている
ぼくは大人に聞きたい
どうして戦争をするの？
子供たちに残したいのは何？
ぼくは海
ただ風とともに
波をきぎむ海
たくさんの時がながれ
人間の生活を
ずっと 見てきたんだ
だから人間たちに伝えてほしい
一度と海で 戦争をしてほしくない
戦争の傷あとを 海に残してほしくない
そして 海で起こった悲劇を
忘れないでほしい
ぼくは海
ぼくは静かに見守っている
浜辺で遊ぶ子供たちを
楽しい家族の笑い声が 響く浜辺を
そして
いつまでもいつまでも 見守っていたい
この 楽しい浜辺が
永遠に続くように
今年もぼくの町では
ハーリー鉦が 鳴り響く